

■ 学年末考査に向けて



3月7日(月)から9日(水)まで学年末考査が実施されます。今年度最後の定期考査です。悔いの残らぬよう、しっかりと準備して臨みましょう。3年生で学校型推薦指定校制での合格者の中には、「定期考査に毎回全力で取り組んだ」と話している人がいました。残り1回ですが、この1回を大事にするのとしないのとでは大きな差につながってしまうかもしれません。「たかが1回の定期考査。3年生になってから頑張ればいいや」などと思わずに、少しでも机に向かって学習したうえで、考査に臨むようにしましょう。

■ 2年生保護者対象進路活動説明会について

例年3月半ばに実施している2年生の保護者の皆様に向けての「進路活動説明会」について、新型コロナウイルスの感染状況がいわき市においても厳しい状況が続いていることから、3月にオンデマンドで配信することになりました。配信期間等、詳細につきましては、後日Classiにてご案内いたします。特に進学関係の情報が中心で、日本学生支援機構奨学金の申込み(予約採用)などについても、お伝えする考えであります(※就職関係につきましては、ご家庭でも特にご注意いただきたいことをお伝えします)。ぜひ、参考にさせていただき、お子様の希望進路実現につなげていただければ幸いです。



■ 3年生の合格体験記

3年生の合格体験記。今回は、福島大学に合格した木村綾人君(3年3組)、国土舘大学に合格した佐藤千華さん(3年4組)、小名浜製錬株式会社小名浜製錬所に内定した上遠野孝介君(3年5組)の3名です。それぞれどのような意識で入学試験・採用試験に臨んだか、どのような対策を取ったかなど、1・2年生にとって参考になることを書いてくれていますので、ぜひ活かしてほしいと思います。

【合格体験記】 木村綾人君(3年3組)
福島大学人文社会学群行政政策学類合格

私は、文武両道を目指してこの学校に入学しました。私はソフトテニス部に所属していましたが、年間を通して休みが無く勉強時間を確保することが困難でした。そのような状況下でも、短い時間の中で効率よく勉強する方法を確立することができました。



部活動が忙しいからと言いつことをしたくなかったので、1年次から気を抜かずに勉学に励んできました。

私は将来、地域コンサルタントの仕事をしたと考え、この進路先を決定しました。その決め手となったのが探究活動でした。探究活動は、自分が行きたい大学や将来、興味があることについて調べることにより、より一層自分の将来像を明確にすることができます。また、入学試験の際にも幅広く役立てることもできるので、探究活動は力を入れて行うことをおすすめします。この活動を経て志望校も決定し、さらに学業に打ち込むことができました。

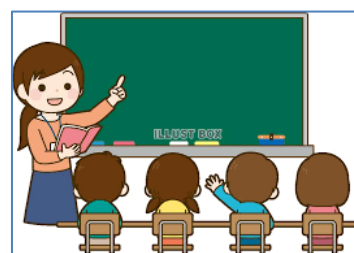
福島大学へは学校推薦型選抜で合格しました。試験内容に小論文がありました。私は文章を書くことが苦手で小論文など書ける気が全くありませんでした。そこで、部活動引退後、すぐに小論文対策を始めました。担任でもある阿部英治先生にご指導いただき、4か月間で50題以上は練習しました。その甲斐もあり、本番では意表を突いた題材が出題されましたが、動揺せずに落ち着いて書くことができました。また、面接では事前に提出したレポートをもとに質問されるため、何を質問されても良いように自分で記述したことについて調べ尽くしました。自分の目標に向けて地道な努力を続けることが、合格への近道だと感じました。

私は部活動引退後、ボランティア活動などにも積極的に取り組みました。そのような経験により、将来やりたいと思っていることへの興味がより深まったり、新しい目標ができたりするのかもしれませんが。皆さんも勉学以外のことにも興味関心を持ち、充実した高校生活を送って欲しいと思います。この受験を通して、努力は必ず報われるということを痛感しました。皆さんも卒業する時に悔いの残らない高校生活を過ごして下さい。

【合格体験記】 佐藤千華さん（3年4組）

国土館大学文学部教育学科初等教育コース合格

私は国土館大学に合格しました。合格発表前まではとても緊張していましたが、合格を知ったときには自分の進路が決まりホッとしました。私が進路を決めたのは高校3年生の春頃でした。それまでは自分が何になりたいかなどをはっきりと決めていなかったで



正直いちばん難しくて大変でした。そこで、春休み中に今までの人生でお世話になった方々を思い出して進路のヒントを見つけようと思いました。そして、いちばん記憶に残っていたのが小学校時代の担任の先生でした。両親に相談しながら自分なりに考えて、小学校教諭を目指すことを決断しました。

（裏面に続く）

受験の準備のとき、いちばん苦労したことは小論文の練習です。私は作文が苦手だったため、先生や作文が得意な友達にたくさん添削をしていただきました。練習を重ねていくうちに自分なりの書き方やコツをつかむことができました。面接の練習もして自分が伝えたいことを覚えていきましたが、本番では練習通りに話すことができませんでした。このことから、ノートに考えて書いた言葉を一字一句覚えて本番に臨むのではなく、ノートに書いたことを自分の言葉で伝える練習が大切だと感じました。

【合格体験記】 上遠野孝介君（3年5組）
小名浜製錬株式会社小名浜製錬所内定



私が小名浜製錬所に入りたいと思ったのは、小学生の頃から高校まで一緒だった先輩の存在があったからです。その先輩から、去年はどのように試験が行われたのか、何を練習すれば良いかを聞きました。求人票に書いてある選考方法も見ながら、面接、適性検査（SPI）を行うのを知りました。面接内容は、これまでに試験を受けてきた先輩方が残してくださった「受験報告書」に書いてあったので、それを見ながら多くの先生方と練習しました。

SPIは国語と数学が出されると書いてあったので、本屋に行き、SPIのテキストを買い、家で毎日少しずつ勉強に励んでいました。そして、試験の当日、緊張しながらも自分を落ち着かせながら、試験場に向かいました。会場に着いて待合室に向かうと、自分以外で10人ほど座っていました。中には知り合いの人もいましたが、この日はライバルだと思い、話をするのはせずに待合室で待っていました。SPIの試験を行うと言われ、移動して試験が始まると、毎日勉強していたおかげで、すらすら問題を解くことができました。

面接の時間となり、自分の順番が回ってきました。毎日先生方と練習した事を思い出しながら、面接室に入りました。面接官が「あまり緊張しなくていいよ」と言ってくださり、緊張がほぐれて面接に集中することができました。練習してきた事と同じような内容が聞かれたので、練習しておいて良かったと思いました。

結果が届くまでとてもハラハラしながら学校生活をしていました。結果通知が届いて、進路指導担当の先生から合格を知らされた時にはとてもうれしく、飛び上がって喜びました。

私が合格できたのは、私だけの力ではありません。家族、先輩、担任の先生はじめ諸先生方、色々な人のお陰で合格することができました。社会人になっても、この感謝の気持ちを忘れず、日々生活していきたいと思えます。1・2年生のみなさんと一緒に働けたらとてもうれしいです。小名浜製錬所を希望する人がいたら、一緒に働けるように願っています。

■ある卒業生の話



だいぶ前の話になってしまいますが、昨年の夏、本校の卒業生で東京の名門私立大学に通う女性から「就職のことで相談がある」と連絡を受けて、ZOOMで話し合いました。当初は1時間程度という約束でしたが、当日は気がつくと2時間半以上にわたって話をしていました。

この卒業生は、マスコミへの就職を選択肢の1つに考えており、筆者が詳しいだろうということで、1度話を聞いておきたいと相談を持ち掛けたようでした。筆者は分かる範囲で自分の経験等を話しましたが、現在彼女が通っている大学から多くの卒業生が報道各社の社員として活動しているはずなので、OB・OG訪問をするよう勧めたところ、「今後、時間をつくって進めていきます」と話していました。四半世紀前の情報よりも、自分と年齢が近い先輩から「就職活動の際にどのような準備をしたか」、「求められる社員像」などについて、直接アドバイスをもらう方がはるかに参考になったこととされます。

元々、この卒業生は航空業界に進みたいという考えを持っていて、本校の他の先生方も、「本人のそんな希望を聞いたことがある」と話していましたが、コロナ禍でなかなか採用がなく、また知人が航空業界で働いているという友人から、「あまり良い話は聞かない」と聞かされることがあったりしたようで、「航空業界は諦めるしかない」と考えているとのことでした。

その他、大手商社の話なども出てきて、多方面で多角的に就職を考えているようでした。厳しいご時世ですので、1つの業界に絞って活動するのはなかなか難しいということでしょうか。ただ、本人から大学生活におけるさまざまなエピソードや困難な事態に直面したときの対応などについて話を聞いていて、非常にしっかりとしており、マスコミであれば、記者向きの印象がありますし、商社などでも十分に活躍していける素養があるように感じました。

さて、この卒業生が話していたことで印象的だったことを1つ紹介しておきます。彼女は中学から本校に通っていましたが、どちらかというと、非常におとなしいイメージがありました。本人は「もっと人と接していかなければダメだ」との思いがあったようで、大学入学後は人と積極的に関わることを意識したようです。また、「中学や高校では勉強だけでなく、部活動やボランティア活動などに積極的に取り組んでおくことが大事だし、そういう活動を積極的にしてきた人の方が大学のサークル活動やゼミなどでも中心的な存在になっていて、充実した学生生活を送っているように感じる」とも話していました。

高校側としては、ある程度受験勉強に集中させないと、特に難関とされる大学に合格するのは難しい現状にあることから、どうしても学習活動中心にならざるを得ない部分があります。ただ、彼女が指摘しているように、大学入学後、「高校時代、勉強しかしてこなかったではダメだ」ということを痛感したようですから、そのこともしっかりと受け止めてほしいと思います。結局は基礎学力も含めた「幅広い人間力の素養」を身につけている人を大学側も求めているのだろうと感じた次第です。1・2年生のみなさんは、次年度以降もさまざまな素養を身につけ、希望進路実現に結びつけられるよう努力してください。

ちなみに、この卒業生は昨年末に帰省した際、学校に顔を見せに来てくれ、「来年（2022年）の秋からアメリカに留学することにした」と話していました。アメリカ留学後、どのような選択をするのか、彼女の将来が楽しみです。

文責：清水聖（進路指導主事）